プログラム・ノート

上田泰史

ベートーヴェン：ピアノ四重奏曲 変ホ長調 作品16 より 第3楽章

26歳、うら若きルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン（1770～1827）の佳作。オリジナルはピアノ、オーボエ、クラリネット、ホルン、ファゴットによる五重奏曲である。1796年から翌年にかけて、作曲者はピアニストとしてチェコ及びドイツ各地で演奏し、その間に本作を書き上げた。今回演奏されるのは、作曲者自身が編曲し1801年にオリジナルの管楽版と同時に出版された、ピアノ四重奏版フィナーレ。ピアノは急速に回転する糸車のような軽快な楽想と華麗なピアノ演奏の両面で、青年の爽やかな情熱が楽しめる。

シューベルト：弦楽三重奏曲 変ロ長調 D. 471

本作を書いた19歳のフランツ・シューベルト（1797～1828）は、すでにドイツ歌曲史の画期を成す「魔王」と「糸をつむぐグレートヒェン」、そして初期の交響曲を書き上げていた。本作は1816年9月という日付を持つが、完成したのは第1楽章のみで、第2楽章は断片のみが伝わる。作曲者は、ハイドンが弦楽四重奏で行ったように各パートの独立性を高め、動機労作（主題モチーフを入念に展開する技法）を徹底し、集中度の高い古典的作品に仕上げている。

シューマン：ピアノ四重奏曲 変ホ長調 作品47 より 第2楽章、第3楽章

1842年はロベルト・シューマン（1810～56）にとって「室内楽の年」にあたる。この年、32歳の作曲者は古典室内楽の研究に没頭し、その成果として3つの弦楽四重奏曲 作品41、ピアノ五重奏曲 作品44、ピアノ四重奏曲 作品47を完成した。今回披露されるのは、知的に構成され甘美な楽想を湛えた作品47からの抜粋である。**第２楽章**：スケルツォ、ト短調。暗い情熱を湛えたスタッカートは、第1楽章のピアノパートから引き継がれており、中間のレガートと対比を成す。**第３楽章**：アンダンテ・カンタービレ、変ロ長調。チェロとヴァイオリンの悲しく切ない歌で始まり、変ト長調の心穏やかなコラールを挟んで最後はヴィオラに出番が回ってくる。

ブラームス：ピアノ四重奏曲第2番 イ長調 作品26 より 第2楽章

1862年11月、ハンブルクからウィーンに移った29歳のヨハネス・ブラームス（1833～97）は、ヴァイオリニスト兼作曲家・指揮者ヨーゼフ・ヘルメスベルガー（1828～93）率いる弦楽四重奏団とともに舞台に立ち、前年に完成された本作を初演した。本日演奏される第2楽章はロンド形式で書かれており、冒頭の主題が何度も現れるが、その都度テクスチュアに変化がもたらされ、反復と多様性、構築性と叙情性が美しく調和する。

ブラームス：ピアノ四重奏曲第1番 ト短調 作品25 より 第4楽章

第2番と同じ1861年に完成され、その年の11月に初演された。今回演奏されるフィナーレは中でも特徴的な楽章で、「アッラ・ツィンガレーゼ」、つまりハンガリー風のロンドである。ブラームスのハンガリー趣味は、20歳頃に友好関係を結んだハンガリー出身のヴァイオリン奏者エデ・レメーニ（1828～98）に負うところが大きい。本作は、両者が『ハンガリー舞曲集』著作権をめぐって衝突する以前の作で、重厚かつ熱狂的な性格を持つ。

（うえだ やすし・音楽学）